巻　頭　言

ESDとは「Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）」の略称で、言い換えれば「持続可能な未来や持続可能な社会を創造する力を育む地球市民のための教育・学習」を意味します。2002年、ヨハネスブルグで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議（WSSD）」での日本政府とNGOの共同提案を契機に、国連総会の採択を受けて「国連ESDの10年（DESD）」（2005～2014年）が始まりました。現在は、2014年に日本で開催されるDESD最終会合「ESDユネスコ会議」をオールジャパンで迎えるために、あらゆる組織、ステークホルダーが尽力しています。

私どもは、2007年に日本初のESD研究機関として「立教大学ESD研究センター」を設立し、2012年度から「立教大学ESD研究所」と名称を変更して新たなスタートを切りました。ESDをめぐる多様な研究・実践活動やネットワーク構築を図っていく中で、とくに東日本大震災と福島第一原子力発電所事故からの復興・再生にESDの視点を取り入れる研究プロジェクトを進めています。

また、2012年度から3年間、私が研究代表者を務める研究プロジェクト「課題解決型シミュレーションによるESDプログラムの開発研究」が、学内の研究助成制度である立教SFR（立教大学学術推進特別重点資金）重点領域プロジェクト研究の採択を受け、ESD研究所の活動と連動する形で、原発事故の被災者の方々をエンパワーメントするための取り組みを展開しています。本書はその成果の一部です。

東日本大震災、福島第一原発事故から2年が過ぎた今もなお、原発事故による影響は大きく、福島県内外で避難生活を強いられている方々が大勢いらっしゃいます。しかし、報道は日々減少し、人々の記憶は徐々に風化しつつある現状に懸念を感じています。そんな今だからこそ、私たち一人一人が「自分事」として、福島の方々が抱えている問題を考えることが必要なのではないか。そうした問題意識に基づき、福島の「今」と向きあうために、過去ではなく進行形の福島を知るために、本書に収録した4回の講演会を開催いたしました。

原子力発電は人類にとって、どのような意味があるのか。その根本を問い直していくことは、エネルギー問題の観点からも持続可能性という問題を孕んでいます。そして、原発事故から私たちは何を学び、今後どのような日本、世界をつくっていけばいいのか。どのような生活をしていくべきなのか。これは私たちに課せられた喫緊の課題なのです。この課題の解決なくして日本の未来はない、世界の未来はないと思います。

本書が、東日本大震災および福島第一原発事故からの復興・再生と、持続可能な未来や社会の創造に寄与することを心から願っています。

立教大学ESD研究所　所長
立教SFR重点領域プロジェクト研究・代表
阿部　治
2013年3月吉日